

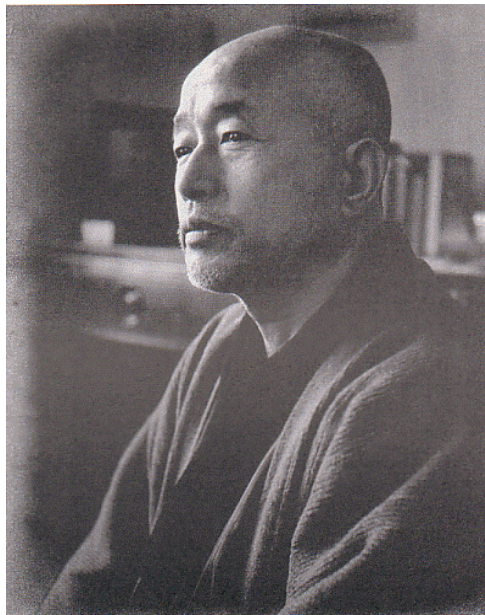
# 石原莞爾生誕百二十年祭趣意書

——来る「人類後史」——戦争なき高雅生活の樹立を目指して——

二度にわたる世界大戦で戦争に明け暮れた二十世紀が終わり、次の輝かしい二十一世紀を迎えたと思われた新世紀年頭（二〇〇一年）、アメリカの繁栄のシンボル（WTC、ワールド・トレード・センター）を崩壊させた驚愕すべき「9・11」同時多発テロが突発しました。

そしていま、世界はアメリカ発の未曾有の金融・経済危機に見舞われています。また、人口爆発に追いつかない食糧の不足、石油を代表とする化石エネルギー資源の枯渇、温暖化・砂漠化の環境破壊の一層の深刻化、天災の頻発、さらにこれらの深刻な問題に伴う資源確保のための大規模な争奪と侵略の危機が懸念されています。

世界の人々を覆う、この不安、閉塞感を払拭する解決の糸口は、果たしてあるのでしょうか？



ここに我らが敬慕する石原莞爾（陸軍中将、一八八九年〜一九四九年）という人物がいます。巷では、「満洲事変（一九三一年）の首謀者」、「十五年戦争の火付け役」などと評されています。しかし、その石原が世界の戦史を研究し、不敗の戦略を編み出した「戦略家」であり、戦争の廃絶と永久の平和を構想した「思想家」であり、宗教と科学の調和を目指した「敬虔な信仰の人」であり、さらに世界の行く末を見通した「予言者」でもあったことは、あまり知られていません。

満洲事変に続く翌年の満洲建国は、石原莞爾の「民族協和」と「王道楽土」の精神によって構想された、日・満・漢・鮮・蒙の五族協和による全く新しい国家建設でした。しかも、この「民族協和」は、五族だけに限るといった偏狭なものではなく、ヨーロッパで弾圧されていたユダヤ人に対しても、当時の日本が「猶太人対策要綱」なる指針を打ち出して、彼らが他民族と同じ平等な取り扱いを受けることができた背景には、この石原の満洲建国理念があったからでした。まさしく、満洲建国とは、「利害や伝統を異にする者同士の相互尊重と協和政体による自立を目指した、世界初の民族協和國家建設の先駆的試み」だったのです。

しかしながら、そうした「世界初」の誇るべき先駆的偉業も、石原莞爾が参謀本部作戦部長時に発生した盧溝橋事件（昭和十二年、一九三七年七月七日）の処理を陸軍の上層部

が誤ったために、「幻（まぼろし）」に終わってしまったことも、歴史の厳然たる事実です。熱誠を込めて戦線の不拡大を説いた石原莞爾に対し、飽くなき戦線の拡大を求めた軍の首脳は彼を解任し（関東軍参謀副長に左遷）、さらに当時の政財界は、資源の拡大を目指して欧米流の植民地経営を模倣した権益主義をもつて、満洲国経営に臨みました。こうして汚された「五族協和」「王道楽土」は、石原莞爾の理想を踏みにじって、単なるモットーとなり果て、やがて約百万の軍勢を中国大陸に送り出すことになりました。そして昭和十六年（一九四一年）十二月八日、無謀な太平洋戦争（大東亜戦争）に突入、日本は全土が焦土に包まれただけでなく、人類史上初めての原爆投下の洗礼を受け、台湾、朝鮮、南樺太、千島列島を失うという大敗北を迎えてしまいました。

石原の世界観の基礎となった思想は、ベルリン留学の研究過程の中で形成されました。それが、かつてない独自の体系でまとめられた「戦争史大観」（一九二九年に構想）であり、その理論の上に構築され、さらに真摯な彼の真信仰によって裏打ちされたのが、有名な『最終戦争論』（一九四〇年）です。

石原莞爾は、日中の不幸な戦争の中にあっても、日本国内はもちろん、中国、満洲、朝鮮の心ある人々と結んで「東亜連盟」を結成し、東亜諸国の政治的独立を尊重することで日中平和の達成を図ろうと、さまざまな努力

を重ねました。しかし、昭和十六年（一九四一年）三月、東條軍閥によって軍籍を追われ予備役編入となりますが、昭和二〇年（一九四五年）八月十五日の敗戦日には、「道義を喪失した日本の敗戦は神意」と受け止め、「身に寸鉄を帯びず、知性と理性、道義の、あらゆる力を動員して最終戦争を回避し、世界の平和的統一の大事業を進めていく努力こそが日本の使命である」と、従来の戦争という手段に訴える考え方を一八〇度転換し、これまた誰よりも早く戦争放棄と道義の確立、科学技術の振興による「新生日本」のビジョンを高々と打ち上げました。

「日本が蹂躪されても構わないから、われわれは絶対、戦争放棄に徹して生きていくべきです。ちようど聖日蓮が龍ノ口に向かつてゆくあの態度、キリストが十字架を背負って刑場におもむくときのその態度を、われわれは国家としてとらなきゃならない」（昭和二十三年十一月）

この二度と悲惨な戦争の犠牲をもたらすことのない永久平和の世界の建設を目指した、石原莞爾の気迫に満ちた戦争放棄の精神は、奇しくも日本国憲法の第九条に盛り込まれています。戦後六十四年の今日まで、日本人の誰一人として戦争による犠牲者が出ていないという事実は、日本人の誇るべき平和の実践として、もっとと世界に知られて良い事柄ではないでしょうか。

また今後、世界大戦の発火点になると危惧されるイスラエルとアラブとの不幸な対立の解決策にしても、石原莞爾が、かつて構想した「満洲国」の建国理念や、その功罪の検証を重ねた時、対立の周辺にある権益主義の背景を含め、宗教的エゴと民族的エゴとを超克

した真の和解と平和への道筋が、そこに見出してゆけるものと思えます。

郷里・山形県の鶴岡に帰った石原莞爾は、ひとりの農民として生きながら、「都市解体」「農工一体」「簡素生活」の建設三原則こそ、来るべき「人類後史」文明の中核的要素であることを語り続けました。これは、今日で言う人間を生態系の一構成員ととらえる「エコロジー」の先駆けであり、ここに描かれた社会は、最新情報ネットワークを活用した自給自足の緑豊かな小都市のイメージでもあります。ここでの協働・互助の人間関係（ヒューマン・セイフティネット）は、モノ・カネの「力」によらず、「道義」によって支え合う、まさに「揺り籠から墓場まで」の理想の協同社会となるでしょう。

人類の理想郷とも言うべきその社会を、石原莞爾は「人頭獅身の健康で文化的な生活」「芸術性に満ちた高雅な生活」とも呼びました。そこには焼け野原になった焦土に立ち、「新生日本」の姿を思い描きながら、さらにその先のかなたに、これから世界が歩むべき「持続可能な和諧社会」「小異が和した大同社会」とも言うべき人類の道標を、しっかりと見据えていた石原莞爾の凜とした姿を見る思いがします。

今年一月二十日、大国アメリカに、バラク・オバマという初めての黒人大統領が誕生しました。「チェンジ（変革）」をキーワードとして訴えると同時に、「アメリカは平和の新時代を先導する役割を果たさなければならぬ」とも語っています。その指導力は未知数としても、世界はいま、アメリカの変革とともに大きく変わろうとしています。

そうした中、私たちは石原莞爾の生誕百二十年と没後六〇年という記念すべき節目の年を迎えました。私たちは、歴史に刻まれた石原莞爾の偉業を讃えると共に、人類の永久平和を目指す世界的流れの最前線に立つ者として、石原莞爾の熱烈な人類愛と、その世界観とを一人でも多くの方々に知って頂き、またその一端を継承して頂きたいと心から願います。左記のような記念イベントを企画致しました。皆様方には、どうか温かいご理解とご賛同を賜りまして、さらに絶大なるご支援・ご協力を頂けますよう、宜しくお願い申し上げます。

石原莞爾生誕百二十年祭実行委員会 一同

東京都新宿区神楽坂六〇七四 ㈱ハピネス内  
電話 〇三―三二六〇―八六一―(代)  
FAX 〇三―三二三五―三二一〇二一

## 記

- 一、募金目標 一千五百万円
- 二、募金方法 一口五千円  
お一人様何口でも可
- 三、振込口座 りそな銀行 神楽坂支店  
名義 石原120年祭(イシワラ120ネンサイ)  
普通預金 口座番号 1543103
- 四、記念事業
  - ① 記念DVD・記念出版物 (募金者には無料贈呈)
  - ② 記念フォーラム
  - ③ 墓参ツアー  
(山形県鶴岡市、本年八月十五日予定)
  - ④ 平和祈念コンサート
  - ⑤ 記念グッズ
- 五、その他

平成二十一年二月五日